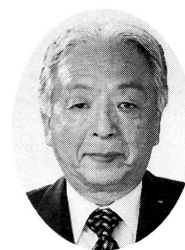


「東京桑野会定期総会」雑感

安部直文

(八十期)



令和4年6月3日(金)
ホテル椿山荘東京で
「令和4年度東京桑野
会定期総会」が開催さ
れた。令和2年度、3

年度は新型コロナウイルス禍で一堂に会する総会が中止となつたために、いわゆる「リアル総会」は3年ぶりである。その間、古川清会長(63期)の急逝もあり、会長選任の意義が込められた総会では、新会長に浅川章(76期)さんが就任をされた。

総会および懇親会の会場となつたのは「胡蝶の間」で、従来は別室で総会を開催後にここで懇親会が行われてきた。今回は新型コロナウイルス感染症防止上、参加者数の制限、短時間、ソーシャルディスタンス確保のためテーブル席に座り、懇親会は和食弁当での飲食、会話の制限という、味気ないものとなつたのは致し方ない。

総会では、近年の物故者の氏名一覧を会場前に掲げる。今般、同期(80期)では小林広志、深谷光男のお二人が物故会員となられた。会場名の「胡蝶」は、中国の故事成語「胡蝶之夢」を想起させる。「人生の儚(はかな)さ」の譬

えて、二年足らずの後に後期高齢者の仲間入りをする身にとつて、同期の逝去は他人事とは思えぬ切実さで迫り来るものがある……。

一覧には、常松俊秀(78期)さんの名もあつた。わが国の核融合研究開発分野におけるリーダーの一人として高名な先輩である。私が一年生当時、三年生の中で「東大に最も近い」と聞き及んでいた秀才だった。高校では言葉を交わすことはなかったが、実は中学一年生の時、自宅に伺つたことがあり、その記憶がふと蘇つた。中学時代の常松さんも、群を抜いて成績が良かった。

驚いたのは、常松さんが自作のロケットを見せてくれたことだ。そして「ぼくは新学期に教科書を手入すると、夏休みまでに全部読んでしまふんだ。だから学校の授業は復習で、家では教科以外の好きな勉強をしている」と言つた。

今思うと、成績を上げるにはどうしたら良いかを教えてもらうための訪問だったのかも知れない。中学生の時にすでに常松さんは科学者という夢を膨らませ、実現に向けたベストの道(東大進学)を選び、歩みを始めていたに相違ない。

その常松さんに成績を良くする秘策を伝授されたのに、ついぞ私はそれを実践することなく安積高校に入学をした。授業初日、教師が「進学志望の大学名を書きなさい」と言つて紙を配布した。高校入試をクリアしてほつとしていた私には、青天の霹靂だった。思いあまつて前席の生徒の肩越しに、のぞき見(カンニング)し

たところ「東京大学法学部」という文字が目に入った。その瞬間、なぜか対抗心が湧き上がり、私は「京都大学文学部」と書いた。中学時代、考古学者を夢見たからで、京大は考古学の分野では東大を上回る権威があつた。しかし、入学後の私は国立大学入試に必須の理数系教科が不得意だったので京大どころではなく、早々に私大文科系へ進路変更をした。

高校では五十音の席順なので一年次の私(アベ)の前席の生徒は「アゲイシ」、すなわち上石利男さんだった。そして、上石さんは初志貫徹で東大へ進み、やがて弁護士となり、東京桑野会では古川会長のもとで幹事長を七年間務め上げた(現在は副会長専任)。その蔭働きを、同期の一人として労いたい。

新型コロナウイルス禍のさなか、開催を巡つて椿山荘との交渉に当たり、今回の「リアル総会」へと導いたのは、昨年7月に幹事長になつた石井俊一さん(82期)である。協力を賜つたホテル椿山荘東京の担当者共々、謝意を表したい。

東京桑野会と椿山荘の関係は、総支配人だった竹花則栄(55期・故人)さんの存在があつたがゆえで、竹花さんの退職後も低予算にも拘わらず何かと便宜を図つていただくことが慣例化した。「令和4年度東京桑野会定期総会」には、5名の来賓と63期から132期までの63名が出席した。次回は、従前のごとく賑々しい会合にならないことを切に願うばかりだ。